

基本的なマナーの習得が 社会で生きる力となる

沼津情報・ビジネス専門学校 (静岡県沼津市)

昭和58年、情報処理技術者の養成校として誕生した沼津情報・ビジネス専門学校。以来30年、専門技術の指導と共に行われてきたのは豊かな人間性を育む“人間教育”である。その一つとしてビジネス科では秘書検定を取り入れ基本的なビジネスマナーの習得を目指している。今回はビジネス科の秘書検定の取り組みを伺った。



リコー通り沿いに建つ
沼津情報・ビジネス専門学校

確かな技術力と 豊かな人間性の育成を目指す

沼津市は伊豆半島のちょうど付け根に位置する。首都圏に近くアクセスがよいことから、数多くの電気機器製造メーカーが集まる地域だ。とりわけJR沼津駅の北側を走る県道は、別名リコー通りと呼ばれるほどメーカーが多数集積している。その通り沿いに立つ沼津情報・ビジネス専門学校は、まさにそれら企業からの要請に応えるために開設された学校である。

昭和58年、情報処理技術者を養成する「沼津情報専門学校」として創立。以来、工業分野での人材育成のほか、近年は商業実務分野や教育・社会福祉分野での人材育成にも力を入れており、「工業」「ビジネス」「教育・社会福祉」の三分野で7学科を設置している。現在、学生数は約400名。志望の職業はそれぞれ異なるが、多くの学生が県内就職を目指して入学してくる。県内

企業への就職競争倍率は毎年高いが、長い間地域と共に歩んできた同校に対する信頼は厚く、企業の方から同校の学生を採用したいという学校指定求人も多数あるという。

このような信頼関係をどのように築いていったのだろうか

か。鈴木経康校長は、同校の教育方針を次のように語る。

「学生には、専門的な技術を身に付けて卒業してほしいと思っています。しかし、それだけでは社会で生きていくことはできません。就職後、人間関係を上手に築くことができなかったら、せっかく身に付けた技術を発揮することは難しいでしょう。そのため本校では、他者と上手にコミュニケーションを取れるようにするため、基本的なビジネスマナーやビジネス実務を学ぶようにしています」。

鈴木校長の言う通り、全学科のカリキュラムには「ビジネス知識」と「コミュニケーション活動」の科目が組み込まれている。ビジネス科ではそれらの科目に加え、「秘書」(1、2年次)「秘書実技演習」(2年次)の学習が必須となっており、両科目における秘書検定の学習を通じて、ビジネスマナーの指導には一層力を入れているという。

ビジネス科の学生は主に、一般事務や銀行員、サービス職などを目指している。そのため、同科ではそれらの職種で必要とされるMOS資格や日商簿記、ファイナンシャルプランニング技能試験など専門分野の資格を取得するのが目標となる。就職面接ではそれらの資格がアピールポイントの一つとなるため、県内の金融機関や保険会社へ就職が決まることも少なくないという。

一方で、同科では前述したように秘書検定も



創立時から同校の柱となっている「工業」分野の授業。イラストやプログラミングまで多彩な授業が満載だ



鈴木経康校長



取得目標に位置付けられている。秘書検定は1年生で3級、2年生で2級の取得を目標に学習するが、1年生の中には初めてこの検定を知る者も多く、最初は戸惑う様子も見られるという。同科1年の上原美咲さんと杉山奈々美さんは秘書検定という名前から秘書を目指す人が受ける資格というイメージが強く、「最初は自分には必要ないと思っていた」と言う。しかし「秘書」の授業で学んでいくうちに、敬語やお辞儀など、社会に出て必要になるマナーを身に付けるための検定だと気付いたそう。

二人が語ってくれたように、秘書検定を学ぶ狙いは「社会に出てから必要になるマナーを学ぶこと」であると、ビジネス科を担当する村松芳博先生と「秘書」の授業を教える荻田友紀子先生は口をそろえる。続けて荻田先生は、基本的なマナーを習得する必要性をこう説明する。

「社会に出てしまえば、たとえ新人であろうとも基本的なマナーは知っていて当たり前だと見なされます。例えば営業や商談に向いた際、通された部屋のどこに座るか、名刺交換の仕方などのマナーがしっかりできていなければ、相手に好印象を与えることはできません。ささいなことですがとても大切です。

これは営業だけでなく、あらゆる職種において必要な要素。どのような仕事も相手と信頼関係を築くことから始まります。社会に出て困らないよう、今のうちに基本的なマナーをしっかり身に付けてほしいのです」。

分らないことをそのままにしない 考える力を付ける指導法

1、2年次の「秘書」の時間は週1回。秘書の知識を理解させるのが目的だ。2年次の「秘書実技演習」では、お辞儀の仕方から名刺交換、お茶の出し方まで、実技を通して立ち居振る舞いを指導する。

教える内容は多岐にわたるものの、他の検定試験対策に比べれば授業時間は少なく、全てを細かく教えるのは難しいという。しかし、だからこそ秘書検定を学ぶ意味をしっかりと理解させることが重要なのだと荻田先生は語る。

「一年間に受ける試験はとも多く、学生は息つく暇もないほどです。しかし、その忙しさに追われて、試験を受ける目的を見失っては意味がありません。ですから秘書の授業では、秘書検定を取得する目的と必要性を最初にしっかりと理解させなければならぬと感じています。これをきつかけに他の試験についても、受ける意味を再確認してほしいと思います」。

授業ではさらに、一つ一つのマナーや立ち居振る舞いについて、なぜそうするのかを繰り返し問い掛けながら授業を進めていくという。「秘書検定を初めて学ぶ学生が多いため、なるべく興味を持って取り組めるようにする必要があります。そこで取り入れたのが、なぜそうするのかを繰り返し問う指導法です。普通



ビジネス科を担当する
村松芳博先生



「秘書」[秘書実技演習]の
授業を担当している
荻田友紀子先生



右から、ビジネス科1年の佐野あすかさん、佐野知咲さん、杉山
奈々美さん、上原美咲さん

の授業では答え合わせをして次に進むことが
多いので、分からない問題をそのままにしてし
まいがちです。しかし一人一人に理由を考えさ
せると、分からないところが明確になるだけで

なく、なぜそうするのかというところまで考え
ることができるようになります。以前は問題を
解く際に、番号を選んで終わりという学生が多
かったのですが、最近は理由を明確にして答え
る習慣が身に付いてきたように思います。授業
中に質問する学生が増えましたし、徐々に学生
たちの考える力が育ってきています」（荻田先
生）。

秘書検定で 社会で生きていく力を 身に付けてほしい

学生たちは「秘書」の授業でどのようなこと
を学んだのだろうか。同科1年の佐野あすかさ
ん、佐野知咲さん、杉山さん、上原さんに振り
返ってもらった。秘書検定で扱われている内容
については「初めて学ぶことばかりで、まだ慣
れない」と口をそろえる。特に尊敬語と謙譲語
の使い分けに苦労しているという。

「『ご覧ください』『拝見します』や『召し上が
る』『いただく』など、尊敬語と謙譲語で言葉が
変わるのが難しい」と言うのは、杉山さんと佐
野あすかさん。「事務用品の名称や名刺交換の
仕方などは覚えるだけで精一杯」と佐野知咲さ
んと上原さんも難しさを実感している。それで
も投げ出すことなく授業時間外も学習に励み、
全員3級を見事に突破した。進級後は2級の内
容を学ぶこととなるが、4人とも「今までより
難しくなると思うので、3級で学んだことを

しっかりと復習し理解を深めたい」「就職活動が
始まるので、その前に基本的なビジネスマナー
を身に付けたい」と意気込みを語ってくれた。

学生たちの言葉を受け、荻田先生は「1年間
頑張った成果が形になると、秘書検定だけでな
く他の検定にも意欲的にチャレンジしようとい
う気持ちにつながります。学生たちが学ぶ必
要性をしっかりと理解し、自ら学ぼうとする姿勢
が身に付いてきたことが何よりうれしい」と、
成長した姿を見て安心した様子だ。

先述のように、現在はビジネス科のみの取り
組みだが、医療事務科の学生にもその評判が伝
わり、自ら選択して秘書検定を受験する学生が
増えている。

「医療機関に就職すれば窓口で働くことにな
りますから、今のうちに基本的なマナーを身に
付けておきたいという学生が増えてきたので
はないか」と医療事務科の渡辺尚明先生は話
す。今後も秘書検定の受験は学生の希望に合わ
せ、選択制で続けていくそうだ。

学科を越えて広まりを見せる秘書検定への
挑戦。意欲的な学生が増えてきたことに対し、
荻田先生はどのように感じているのだろうか。
最後に学生たちに対する思いを聞いた。

「自分の将来をしっかりと見据え、学びたいと
言ってくる意欲的な学生が増えてきたことは
とてもうれしく思います。社会に出て生きてい
く力を、秘書検定を通して学んでほしいと願
っています」。